

北北東の風、マイナス三度

山際淳司



ほくほくとう かぜ
北北東の風、マイナス三度

やまざわじゅんじ
山際淳司

© Junji Yamagiwa 1989

1989年3月15日第1刷発行



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願
いいたします。(庫一)

ISBN4-06-184410-5 (0)

北北東の風、マイナス三度

山際淳司

目次

人工海浜

事件

桜売

タンゴ

サブウェイ・ファンクラブ

ペーパー・プレイン

七

元

四

九

八

一〇九

カウント・ダウン

一二七

北北東の風、マイナス三度

一四七

季節はずれの蝶

一六五

雲、ひとつ

一八五

火祭

二〇五

猫と剥製はくせい

二三五

あとがき

二四七

北北東の風、
マイナス三度

人工海浜

海はまだ、眠っている。

その時刻、湾内を見わたしても、動くものは何ひとつない。波、と呼べるようなものもここにはない。強い風が吹く日にはここらあたりでも波頭がたつ。大型船舶が通過したあとにはさざ波がやってくる。しかし今は風もない。湾内には大きな船が停泊している。遠くに見える船の灯りで、おおよその大きさを知ることができるのだ。その船舶も、今は錨いかりをおろして微動だにしない。

例外は一隻せきのランチである。

ランチは今、飛行場の沖にさしかかったところだ。湾の北西の一面に飛行機の飛び立てるスペースがある。そのあたりを北上するランチには男が一人、乗っている。ごくごく小さな赤い灯は、ちょうどその男が煙草に火をつけたことによるものだ。そうして男は、ふしくれだった指で潮の匂いのしみこんだ髪をかきあげた。彼にとって、湾内は自分の庭のようなものだった。ランチを動かすことは、彼の仕事の一部だった。例えば湾の沖に船が停泊する。そこから乗組員を陸おち

にあげるのが彼の仕事だ。あるいは物を運ぶこともある。人であれ、物であれ、運ぶものは何でもかまわなかった。そのどちらでも、同じような収入を得ることができた。いずれにせよ、彼の仕事はすべて湾内ではじまり、湾内で終わる。男は、そういう仕事をもうずいぶんと長いあいだつづけている。

湾は、年々、変わってきた。新しい人工島がつぎつぎと作られていくせいである。それでも毎日、そのありさまを見ていれば、まごつくこともない。その時刻、海には何の光もないが、彼は方向を誤ることなくランチを前進させることができる。

光は遠くに見える。例えば西側には工場地帯の灯りである。人工島にも建造物がある。巨大な倉庫があるし、高い煙突もある。その向こうには、街の灯りが見える。どこまでもうねうねとつづくビル山々だ。高い建造物には航空障害灯が設置されている。灯の色は例外なく、赤だ。

赤い光が点灯し、消える。くりかえし、休むことなく点滅しつづけている。ついては消え、消えてはつく。そのペースはさまざまだ。一秒刻みで点滅をくりかえす赤い灯がある。一・五秒でつく灯りもある。まだあたりが暗い時刻に湾をさかのぼっていけば、誰もがその数百、いや数千もの赤の点滅を目にするはずだ。

この街はどんな時刻でも息づいている。

休むことなく鼓動をくりかえしている。せわしなく、ちかちかと赤い命を燃やしながら。あるいは息もたえだえにゆっくりと、赤い息を吐き出しながら。

ランチは比較的新しく作られた人工島に向かって進む。その島の端にひとときわ明るい光が見え

る。信号所である。その信号所の手前で、ランチは西に折れた。左側にはもう一つの人工島が見えてくる。二つの人工島の間は幅二百五十メートルほどの水路になっている。ランチをあやつる男は時計を見た。午前五時になろうとしている。ちょうどいい時間だなと、彼は思った。ランチは水路の中央を進んだ。水深の浅いところもある。どこを通ればいいか、彼はわきまえていた。このあたりのことで、彼の知らないことはなかった。水路を入って直進すれば、やがて大きな橋の下をくぐり抜けることになる。ランチはその大橋をくぐって右折し、運河に入ることになるだろう。

彼にはわからないことが一つだけあった。

ほんの数年前、人工島の一面に見えない建物たちがはじめたことだった。ここらあたりに作られるものといえば、工場か倉庫ときまっていた。そしてコンテナ基地だ。人工島に人かげは少ない。目につくものといえば、トラックと、梱包された荷物の山だった。

ところが、その一面に建ちはじめたのは工場でも倉庫でもなかった。まず、鉄骨が組みあげられた。建物は十数階の高さで直方体をしていた。倉庫にしては華奢な作りだなと、彼は思った。そのうちに外壁が完成した。同じ大ききの窓が縦、横に整然と並んでいた。そして、どの窓にも柵がとりつけられた。それはベランダであり、いくつも同じような形で建てられたのは高層マンションだった。

こんなところにマンションが建つのかと、彼はおどろいた。

人工島は無機的な空間であるはずだった。そこは物のための空間だった。木材、水産物、食

品、石油……等々、圧倒的な量の物が陸あげされ、あるいは送り出されていくのが湾内の人工島だった。

その一面に、人の棲む場所ができたのだった。建物が完成すると、その周囲にさかんに木が植えこまれた。公園が作られた。一体、どういう人間が、この人工島に棲みつこうなどと考えるのか。そこらへんが、彼にはよくわからなかった。

その高層マンションの灯りが見えている。ずっと遠くからも見ることができる。人工島には、ほかに高い建物はない。そのマンションの屋上でも、赤い灯が呼吸している。それをとりかこむ道路の街路灯はほの白い光を放ち、列をなして闇のなかに浮かんでいる。あたりが明るくなるには、まだあと一時間ほど待たなければならぬだろう。

運河を北に向かうと小さな橋に出あう。ランチに乗る男はそこまで行くことになっていた。

それだけのことならば、こんな仕事を引き受けはしなかっただろう。軽エンジン付きのゴムボートを数時間借りたいんだが、といってある男が電話をしてきたのだった。何に使うのかと、彼はたずねた。

「ちよつとね、湾を横切りたいんですよ」

「それで？」

「それでって？」

「湾を横切ってどうするんかね」

「いや、それだけです。向こう側のほうにね、行ってみたいと思ひまして」

ランチはゴムボートを曳^ひいている。注文どおり、軽エンジンをつけたものだ。電話をしてきた男はエスと名乗った。〈江須〉と書くのだといった。自分はカメラマンだと、明け方の港の写真を撮りたいのだと、いった。ならばランチに乗ればいいというと、江須はできれば一人で乗れるものが欲しいと答えた。そして、自分は人工島にあたらしくできた高層マンションに住んでいる、運河を北にあがったところにかかっている小さな橋のたもとまで行くからそこにボートをもつてきてほしいというのだった。

杓子定規^{しゃくしじょうぎ}に仕事をすれば断るしかない注文だった。第一に江須は舟を動かすための免許証を持つていない。しかも早朝である。だめだ、の一言で断つてもよかった。万が一、事故が起きたら面倒なことにもなるだろう。しかし、貸したボートが妙なこと——たとえば犯罪にかかわるような——に使われることはないだろうと思われた。そういうことに使うなら、とびこみで頼んでくることはない。たいてい、しかるべきルートを通じて借りにくるものだ。

江須があゝ、海に浮かぶ塔のように見える高層住宅に住んでいるという、そのひと言が、長い間、湾内で生きてきた男の気持ちを動かしたのかもしれない。人工島に住む男の顔を見たいと思つたのだ。

江須裕は運河にかかる橋の上に立ってねっとりした水の流れを見つめていた。空気はひやりと冷たい。江須は羽毛のブルゾンを着こんでいる。それでも少し寒いくらいだった。

遠くを、ヘッドライトの光が飛ぶように流れていった。かすかに、ほんのかすかにエンジン音

が聞こえてくる。そして、静寂。やがてまた一つ、ヘッドライトの光が流れる。湾岸道路を走るクルマの光だった。

ランチはまだ見えない。彼はポケットからハンドライトをとり出した。そして時計を見た。午前五時をまわったところだった。ハンドライトをつけたまま、こわきにかかえていた小冊子をひろげた。港の地図が光のなかに浮かびあがる。それを見ると、港のことは手にとるようにわかる。

水が動く気配があった。

来たなど、江須は思った。運河を、一隻のランチがゆっくりとあがってきた。江須はハンドライトをつけ、大きな円を描くように振った。

「使い方はわかるかね」

「えっ？」

「エンジンのかけ方さ」

「多分ね。むずかしくないんでしょ。エンジンをかけて、あとは方向舵ほうこうだを握ってコントロールすればいい。モーターボートの要領でしょ」

「あれほどスピードは出ない」

「スピードはいらないんだ。ゆっくりいっても一時間もあれば向こう側に行かれる」

「それでどうするんだ。……立ちいったこと聞くようだけだよ」

「別に。戻ってきますよ、ちゃんと」

「……………」

ランチの男は、スポーティーなブルーのブルゾンを着こんだ男を見つめた。年は三十代だろう。目つきは悪くない。カメラマンだといったな。たしかにサラリーマンには見えない。しかし……。

江須が往復してくるというコースはたいした距離ではない。いくつもの人工島を迂回^{うわい}していったにせよ、小一時間で向こう側につけるだろう。そこをただ往復してくるだけだど？ そんなバカな話があるもんか。ランチで軽エンジン付きのゴムボートを運び、そのあと数時間レンタルするだけだつて高くつくのだ。

「津村さん、でしたよね」

江須は男に話しかけた。

「別にやばいことをするわけじゃないですからね。津村さんには迷惑かけませんよ」

「かけられちゃ困るけどよ、ただね……」

「何ですか？」

「変わった男もいるもんだなと思ってよ」

「そうですねえ」

江須はくどくどと説明する気はなかった。話しても、鼻さきで笑われるだけだろうと思っていた。彼はその、計画と呼べるほどのものでもない思いつきを妻に話したときのことを思い出し

た。

「そう。それでどうするの？」

彼の妻はそういった。

「別に。だからどうっていうわけじゃないさ。ただそういうことを思いついたから実行してみたくなっただけだよ」

会話はそれだけで終わった。江須はそれ以上、理解してもらおうとも思わなかった。だから今日も、彼は一人そつとベッドを抜けだし、静まりかえるマンションの廊下を歩き、ドアの閉まるときにブザーの鳴るエレベーターを使わずに階段をおりて外に出てきた。

エンジンをかけると、ゴムのボートは大きく揺れた。思ったより大きなボートだった。中には救命胴衣とオールが無雑作に積みこまれていた。ランチとボートのあいだで二、三の会話がかわされた。津村はボートの操縦に関していくつかの注意事項を伝えた。江須はまたここに戻ってくるおおよその時刻を告げた。そしてボートをつないでいたロープを投げ返した。

江須の乗るボートはゆつくりと、運河を下りはじめた。陸から見ると運河や港内はいつも暗く見えた。しかし、海から見るとあたりは決して暗くはなかった。様々な光があった。運河を下ると、左側にも右側にも高速道路が見える。やがて大きな橋が見えてくる。鉄骨とコンクリートで造られた構造物には、いたるところに光があった。そのアングルは、彼がいつも見ているものとはまるで異なっていた。

そのことに気づいたとき、江須はカメラを持ってこなかったことにも気づいた。彼が手に持つ